



上海世界水泳選手権を肌で感じた タサカのリターン

今年の世界水泳選手権は、

勝手

編集部、タサカが現地取材を敢行。肌で感じた世界大会を、タサカ目線で振り返る。

会場だからこそ感じる 「雰囲気」の正体とは？

競泳競技が始まってすぐ、日本チームは沈みきっていた。大会初日の決勝進出者はレイも含めて、なし。2日目に行われる100m平泳ぎに期待が集まったが、北島康介は4位に沈む。レース後、彼はミックスゾーンで取材。ダーレ・オーエンを讀えながらも、自身については弱音しか出てこなかった。北島が記者に対して、弱音を吐くことは今まで一度もなかったことだ。加藤ゆか、酒井生穂、立石諒に話を聞いても、やはり沈んだ印象を受ける。完全にマイナスの雰囲気か日本チームに充滿していたのを感じとれるほど。

3日目には、思わぬ出来事も発生する。女子200m自由形予選、同着の16位となり、準決勝進出をかけたスライムオプを行うのが、なんと日本人選手同士だったのである。上田春佳も伊藤華英も「どうしましょう」ととまどいを口にする。予選競技終了後、200mのスライムオプが行われ、上田春佳が

準決勝進出を決める。が、2人とも予選よりタイムを上げた。どちらかがスライムオプのタイムで泳いでおけば、1日に3本泳ぐ必要がなかったのだ。チームの雰囲気かこういふ結果となって表れたように感じられたのは、私だけではないはずだ。



それを打ち破ったのは、大会3日目の100m背泳ぎ決勝。入江陵介が09年以來の52秒台で3位に入ったのである。初日の予選、準決勝後、ミックスゾーンでの彼は、非常に落ち着いていた。何もかもが予定通り、といった雰囲気だ。そして銅メダル。1位との差が0秒22だったことには悔しさをにじませたが、タイムには満足しており、明るい話題がようやくやく訪れた瞬間だった。

4日目には、怪物退治に日本チーム男子キャプテンの松田丈志が200mバタフライに登場する。レース展開は先に述べたとおりだが、マイケル・フェルプスにしてやられた感じがある。フェルプスは、あまり調子が良くない

とき、最初の50mで周りを引き離そうとする傾向がある。3日目に行われた200m自由形、このときも同じように最初の50mを飛ばしてライアン・ロクテを引離そうとした。そうして間の50・150mで様子を見て、ラスト50mで再度まくる展開だ。結果、ロクテに敗れたものの、200mバタフライ決勝でも同じようなレース展開を見せる。50mまでには徐々に追いつかせる。そして迎えたラスト50m。余裕のあるフェルプスは松田をかわして優勝をさらった。タイム的には53秒台と、フェルプスとしてはあまり良くないタイムだったことを考えると、フェルプスのレース巧みの方が存分に発揮された結果だったのではないだろうか。

後半戦に突入した5日目。女子200mバタフライの星奈津美の惜しい4位、堀畑也の200m個人メドレーでの決勝進出や、北島康介の復調など、一気に日本チームの話題が増えてきた。この日から、日本人選手の決勝進出者

も増え、記者たちはミックスゾーンで待機する時間が長くなったほどだ。
※ ※ ※
全8日間の日程を取材して感じたのは「雰囲気」の重要さである。日本チームが入江の銅メダルから一気に活気づいたのは、先に述べたとおり。そして、約18000人を収容する会場が連日ほぼ満員になり、中国人選手が登場するたびに会場が小刻みに揺れるほどの大歓声がわき起こる。これは、プレスシートに座っているだけの私ですらブレッシングャーに感じてしまうほどの威圧感があった。この威圧感も、会場を取り巻く「雰囲気」でもあった。そして今大会、競泳のみで29個のメダルを獲得したアメリカチームは、「水泳大國アメリカ」の強さを感じるには十分な「雰囲気」をチーム全体が持っていた。「五輪には魔物が潜む」と言われるが、世界大会すべてに当てはまる言葉なのではないだろうか。そして、その魔物の正体は会場で、レースで、身体全体で感じ取る「雰囲気」そのものなのかもしれない。「雰囲気」そのもの、いつも通り自分の力を発揮しようと思っただけ、間違えなく自らの世界「ゾーン」に入るしかない。それは経験から得られるもの。日本の精鋭26人の選手たちは、少なくとも今回、この魔物を肌で感じ取ったはずだ。これを生かすも殺すも、自分次第。この26人が、来年どれだけ成長した姿を見せてくれるのか、私は楽しみにしている。

課題の残るマイメイトジャパン 日本の技術力を いつ発揮できるか



ソロで圧倒的な強さを魅せたナタリア・イシェンコ（ロシア）。ソロは世界水泳のみなので、五輪よりも大切だという選手もいる

演技の安定感が求められる 飛込は惜しくも 決勝進出者を出せず

飛込では、10m競技の準決勝を見るのができた。中国の邱波がずば抜けた力を見せる。それに食いつがる日本の村上和基だったが、ほぼ決勝進出五輪代表権獲得ライン）を決めていたと

私が会場入りした23日には、メイン会場であるインドアスタジアム別名・海上王冠で、シンクロノイズドスイミングのチーム・フリールーティンが行われていた。若い日本チームには課題の残る結果ではあったが、必ずや糧となるだろう。ここで伝えておきたいのは、チームで2位に入った中国は井村雅代コーチが指導しており、3位に入ったスペインは、以前元日本代表の藤木麻祐子コーチが指導していた（現在はアメリカ代表を指導）。これは日本の技術力の高さを証明しているのではないだろうか。



約3年振りに復帰した寺内健だが、こちらも決勝には進めず。難易度を上げる世界の流れに早く追いつきたい

新しい歴史を作った水球 今後の活躍に期待が高まる

厳しい結果に終わった飛込、シンクロだったが、水球は初の決勝トナメント進出を果たした。結果、過去最高順位11位で今大会を終えた。私が取材できたのは、決勝トナメントの日本対ドイツである。2m級の選手を抱えるドイツは劣る感じが受け付けない。点差を獲って獲られてのシーソーゲームはドイツが制したものの、世界で十分に戦える力を示したゲームとなった。試合後、高木英樹チームリーダーは「勝つ

世界で戦えることを 示したOWSは 五輪の2次予選に すべてをかける



水球の決勝はセルビア対イタリア。熱戦を制したのは、イタリア。終了後はゴールを壊すほどの喜びがあった

つもりだったし、チャンスはあったが、守りきれなかった。決勝トナメントに残った時点で未体験ゾーン。これから私たちが水球の歴史を作っていくことに。臆することなく、前に進んで行きたい」と語った。

次予選では必ずや出場権を得てくれるはずだ。



競泳が行われた、インドアスタジアム全景。ここから数多くのドラマが生まれた

「TROPHY FOR JOURNALISTS」

世界水泳選手権では、公式計時を行っているオメガが主催する「TROPHY FOR JOURNALISTS」という、通称メディアレースが開催される。今大会に参加しているジャーナリストやフォトグラファーが対象のレースイベント。誰でも優勝のチャンスがあるように、事前の申告タイムと実際に泳いだタイムの差で競う、というルール。種目は50mフリースタイル。会場はもちろん競泳のメイン会場。選手たちがのびのびと景色を見ているのを見ては、水、推進、スタート台など、肌で感じられたのは、非常に貴重な経験だった。ちなみにタサカは3位に入り、オメガのカプセルを賞品としていただいた。世界水泳選手権を全員で盛り上げ、全員で楽しむというスタンスは、世界大会ならではの、貴重な経験